

『南極物語』

1983年／日本／蔵原惟繕監督作品

条件反射的に涙があふれる 感動のラストシーン

会員 鈴木 理晶 (56期)

犬はなんて健気でかわいいんだ。この映画を観るたびにそう思う。

前半のみどころは、高倉健扮する潮田暁らが遭難しかかるシーン。

ホワイトアウトで遭難寸前の潮田らは、一か八かタロとジロを放して昭和基地に救援を求める。タロとジロは、見事に昭和基地にたどり着くやいなや、「僕たちについて来て」と言わんばかりに踵を返し、潮田らのもとに救援隊を導く。タロとジロは、自らの危険をかえりみず人間を助けるために引き返すのである。なんと健気なことか。

隠れた名シーンが、渡瀬恒彦扮する越智健二郎とわんぱく犬ゴロとのやりとり。

偶然に自由の身になって越智から逃げようとするゴロだが、越智が冗談半分に土下座して「頼む、帰ってきてくれ」と言うと改心したように戻ってくるのである。ゴロは結局、昭和基地で鎖につながれたまま命を落してしまう。吹雪の中でゴロが何度「頼む、帰ってき

てくれ」と叫んだかと思うと、ほのぼのしたこのワンシーンでさえ、なんとも言えない悲しい気持ちになる。

そして、犬たちを置き去りにしてから1年後、誰もが知っているラストシーン。

越智が冷たくなったゴロを雪の中から発見して涙した後、潮田が遠くに2頭の犬影を見つける。潮田が声にならない声で「タロ!」と叫ぶと、タロとジロが潮田と越智の胸に飛び込んでくる。

健気すぎる…。野生化して「獲物だ!」と潮田らに襲いかかるのでもなく、人間のように涙を流しながら「埴生の宿も♪」とビルマの竖琴を弾いて去っていくのでもなく、タロとジロは一目散に駆け寄ってくるのだ。タロとジロの健気な忠犬ぶりに大感動である。

ちなみに、この感動のラストシーンを盛り上げてくれるのが、ギリシャを代表する名音楽家ヴァンゲリスの曲である。もう映像がなくても、この曲が流れるだけで涙があふれてきてしまう。そう、完全に条件反射なのである、ワン。



『南極物語』
発売元：フジテレビ・学研・蔵原プロ
販売元：ポニーキャニオン
価格：5,040円(税込)
発売中